

Title	<紹介>吉田三右衛門編 『銀札座覚書』
Author(s)	作道, 洋太郎
Citation	史林 = THE SHIRIN or the JOURNAL OF HISTORY (1977), 60(4): 618-619
Issue Date	1977-07-01
URL	https://doi.org/10.14989/shirin_60_618
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

紹介

吉田三右衛門編

『銀札座覚書』

本書は丹波福知山藩（朽木氏・三万二千石）の豪商として知られていた吉田三右衛門家が引請けていた銀札座の記録に関する概要を簡潔に述べた解題篇と、その典拠である「御用覚日記」（銀札座覚書）を原文のまま紹介した資料篇とから成っている。

本書には編者の吉田三右衛門氏はじめ、山口啓二・朝尾直弘・石川準吉の各氏の序文が付せられ、藩札史の研究史上における本書の位置づけが試みられており、さらに芦田完氏により解題がなされ、本書の特質と問題点が明らかにされている。小稿においては、このような見解を参考として、本書の特色を考えてみることにしたい。

編者の吉田三右衛門（政佳）氏は、同家の第十六代目にあたり、その初代が福知山藩領に來住したのは承応二年（一六五三）であったと伝えられる。同家の遠祖は武田の遺臣ともいわれ、宮津藩に致仕してから後、福知山に移住し、城下町の菱屋町に定住し

て宮津の塩を取り扱い、屋号を「塩屋」と称えた。塩問屋のほか、酒造業・鉄問屋・質屋業・両替業・呉服業などを営み、経営の多角化に成功し、元禄期には領内屈指の豪商となり、福知山音頭の歌詞のなかで、「船が着く着く塩屋の門へ、あれは三右衛門さんの通い船」とさえうたわれるようになった。

このような営業基盤の確立とその発展にともない、同家は福知山藩財政の運営に関与することが多くなり、安永二年（一七七二）には藩の掛屋に登用され、さらに翌三年には銀札座の業務を命ぜられることになった。福知山藩においてはじめて藩札を発行したのは同三年十一月で、その種類は銀十匁・五匁・一匁・五分・三分・二分・一分の銀札七種であった（荒木豊三郎編『増訂日本古紙幣類鑑』中巻、六五ページ）。

福知山藩札の発行事情は必ずしも明らかではないが、吉田家が当初からその札遣いに関与したのは、その前半にさきに述べたように掛屋を命ぜられ、年貢米の売捌きやその代金の出納業務をおこない、藩の金融にかかわりあいを持っていたことによるものと推測される。

本書には、吉田家が藩札の発行業務を引請け、銀札座の運営を担当して以来、文政十二年（一八二九）にそれを免ぜられるまで五十六年間にわたる記録が収められており、その間における藩財政の動向や豪商の対応関係が明らかにされており興味深い。

本書に収録された銀札座関係資料とその解題を読みながらとくに感じたことは、わたくしがかつて九州日田の広瀬家文書の銀札会所関係資料によって、「日田金」の雄広瀬久兵衛が対馬藩田代領（肥前國の飛地）の藩札発行に関与した時の事情を取り扱ったさいの記録との類似点と相違点であった（拙著『日本貨幣金融史の研究』一六一―八八ページ参照）。

地方の豪商が藩経済の再建に協力し、藩札の発行とその流通を管理するという点においては両者とも共通しているが、藩当局と銀札座ないし銀札会所の運営を引請けていた豪商との間における勢力関係には相違がみられる。すなわち、福知山藩の吉田家の場合には、同家が藩当局からの強い要請を受けて、いわば受身の形で銀札座の経営をおこなっていたのに対して、日田の広瀬家の場合には、藩当局の規制力は相対的に

弱く、同家がアクティブに銀札会所を運営していた点が注目される。したがって、本書で取り上げられている吉田家の場合は、藩権力の強大な「純粹領国型」における札遣いの実態をしめしており、また広瀬家の場合は、藩権力が比較的微弱な「特殊領国型」の事例ということが出来る。このような他領藩札との比較史的考察によって、福知山藩札の特質がいつそう明らかに出来るであろう。

本書に引き続いて、『吉田家家譜』の刊行が計画されているという(本書、序文七ページ)。本書に対する書評や感想は、その刊行により吉田家の全貌が明らかにされたいに、あらためて試みられることになろうが、本書を通読して感じたことは、このような藩の財政と貨幣金融を支配していた豪商の土地所有の状況がどのようなものであったかという点である。

幕藩制社会はその成立の当初から土地経済と貨幣経済の矛盾をはらんでおり、石高制を基調とした社会経済体制にその基礎を置きながらも、進展する貨幣経済にいかに対応するかという課題を持っていた。

吉田家の場合についても、商業経営の多

角化という面ばかりではなく、商人地主としての地主的土地所有を基盤として、銀札座の管理者という新しい役職や機能があられたものと推測され、これらの両者の関連を明らかにすることが、今後に残された研究課題といえるであろう。その意味においても、同家の家譜に関する研究が集大成され、それが刊行されることを望まうしだいである。

(A5判一五五ページ、昭和五十一年二月発行)
比叡書房 二一八〇〇円

(作道洋太郎・大阪大学経済学部教授)

M. R. Morgan,

*The Chronicle of Ernoul
and the Continuations of
William of Tyre*

従来「Ernoulの年代記」と呼ばれて来たものとWilliam of Tyreの年代記の「続篇」所謂 *Estoire des Eracles* とは、一二世紀末〜一三世紀前半の十字軍國家の中心的な史料の一つとして夙に公刊もされ、多くの十字軍研究者に利用されて来た。しかし、本書の著者も指摘する如く、数種類に及ぶ異本相互の關係や作者に擬せられる

Ernoulが実際に書いたのはどのような本であったのか等々が明確にされていない。また、L. de Mas-Latrieがその編纂に際してErnoulの名を冠したが故に *Chronique d'Ernoul et de Bernard le Trésorier de l'Recueil des Historiens des Croisades* がその底本に用いたが故に *Eracles a 1100* (Colbert-Fontainebleau 本) とが、あまり根拠もなしに重視されがちであった。

著者はこうした状況を批判して、それら諸年代記の構造を検討し、諸本間の關係やそれらとErnoulの原年代記との關係を解明しようとする。原史料を用いる場合に不可欠とも言えるこうした研究が、我國は固より西欧においても今まであまり行なわれて来なかったのは意外なことであるが、これに一つの解答を与えた点で、本書の価値は極めて貴重だと思われる。

内容は実証研究が大部分を占めているが、詳細な紹介をここで行なうのは紙幅の都合から不可能であり、本稿では、実際に年代記を用いる場合に有用であろうと思われる結論的な部分を列挙しておきたい。

Ernoulは一二三二年にキプロスで重要な役割を果たしているArneis de Gibelet